商業教育支部だより

2013.2.1
第70号

愛媛県高等学校教材センター商業教育支部

松山市旭町　松山商業高等学校内

編集　商業教育支部
　　事　務　局
印刷　川邊印刷㈱
　　(941－4586)

視聴覚教材について想うこと

愛媛県立土居高等学校　教諭　曽我部　　弘

ここ十数年で急激に情報化が進み、今やコンピュータなしの生活は考えられなくなっています。学校現場においても同様で、教科『情報』の必修化、各教室へのパソコン設置など、生徒にとっても情報機器は身近なものとなっています。

視聴覚教材に注目しますと、私が新規採用教員の頃は、ＯＨＰを利用して研究授業をしたり、教材センターから８ミリフィルムを借りて授業をしたりといったものが主流でしたが、最近はビデオやＤＶＤ、プレゼンテーションソフトなどの教材を用いることが多くなりました。本校でもプレゼンテーションソフトを用いた授業や発表会が盛んに行われています。私自身は「簿記」の授業の中でプレゼンテーションを用いたことがあります。また、本校で２月に実施しているインターンシップの報告会では、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行っています。この報告会は、生徒はもちろん保護者や地元企業の方もお招きして実施しているものです。ですから発表する生徒は、見る人が興味を持ってくれるように、集中して聞いてもらえるようにとアイデアを駆使してパワーポイントを作成します。文字の大きさや配色、背景など、考えなければならないポイントが数多くあります。生徒に教材を示す経験と、生徒にソフトを作成させた経験から気付いたことがあります。視聴覚教材は視覚や聴覚に訴えるという点においては大変有効ですが、使い方を間違えると効果が半減するということです。アニメーションに気を取られすぎてかえって見にくくなってしまったり、情報を詰め込みすぎて要点が分からなくなってしまったりということのないように、効果的な活用法を模索する必要性を感じています。また、最近あまり用いられなくなった教材をもう一度見直すことも必要ではないでしょうか。商業の「接遇」の分野で用いることのできるいい教材が多く眠っているように思います。

テレビの世界では、アナログ放送が終了し、デジタル放送が始まりました。これからは様々なメディアにおいて双方向受信が可能となります。学校現場においても、情報を受け取るだけではなく、情報を発信するための視聴覚教材の活用法を研究していくべきであると考えます。視聴覚教材の「不易」と「流行」をうまく取り混ぜながら、生徒にとってより効果的な授業ができるよう心掛けていきたいと思います。

視聴覚教材について想うこと

愛媛県立宇和島東高等学校　教諭　大　石　哲　也

近年の科学技術やＩＣＴの急速な進展により、黒板やホワイトボード、プリントの学習教材のほかに、多様な視聴覚教材が活用されるようになった。これまでに受講した視聴覚教育の研修においても、初任者研修では「ＯＨＰの活用方法やＴＰ教材の作成実習」、２期研修では「プレゼンテーションソフトウェアを用いたマルチメディア教材の制作」、10年研修では「ノンリニア編集によるビデオ教材の制作」など用いられた視聴覚機器や教材は様々であった。これらの研修のたびに、技能の習得や効果的な活用方法の研究の必要性を実感した。また２年前、海外研修を受けた先生の報告の中で、北欧の商業高校の先生が電子黒板（インタラクティブボード）を活用して説明し、生徒が端末用パソコンを操作しながら授業を受けている画像を目にして、先進的な教育スタイルに感心した。海外の学校では、電子黒板の活用により学力向上が図れると考えられており、授業の時にすぐに使えるよう教室に手書きができる壁や天井固定型電子黒板も設置されている。一方、日本の学校では、授業前に電子黒板の設定をする方式のものが多く、準備に対する教員の負担が大きく設置が進まなかったが、現在は一体型電子黒板が開発され、準備に対する負担は軽減され、大幅に普及が進んでいる。今年３月現在では、全国の72.5％の学校（愛媛県は83.3％）に設置され、この３年間で約4.5倍も増加した。本校の商業科には、７年前から総合情報実践室に２台設置されている。デジタル教科書やコンピュータ（インターネット）の画像などを大きく映し出し、電子ペンで書き込むことが可能である。そのため、生徒に背を向けて板書する時間は大きく削減され、定着させたい学習内容に時間をかけることができるようになったことで、効率よく授業を進めることができるというメリットが報告されている。

昨年、本校に赴任し、先生方が書画カメラ（実物投影機）とプロジェクタ、マグネットタイプスクリーンを教室に持ち込んで頻繁に活用されていることに驚いた。事前の準備が簡単で、手元の教科書や問題集などを直接投影し、口頭での説明に視覚教材を加えて理解を深めていたのである。私たちの持つ五官の知覚は、視覚から83％、聴覚から11％、嗅覚から 3.5％、触角から 1.5％、味覚から 1.0％の学習をおこなうといわれている。視覚と聴覚を合わせると、なんと94％になる。学習内容に応じて視覚を加えることが生徒の理解度の大幅なアップになる。私自身も、今年の夏にこの機器を活用する機会があった。簿記の代講を４日間した際に、学習内容が精算表、損益計算書や貸借対照表を作成する決算処理であったため、効率よく指導する方法として、この機器が頭に浮かんだ。初めて使用する機器に戸惑いを感じつつ、生徒に確認しながら記帳をさせたことで、初めて指導した生徒ではあったが後日の記帳練習も予想以上の定着がみられ、ひと安心した。新しい視聴覚機器を積極的に活用し、工夫することの大切さを改めて感じた。

今回、視聴覚教材や機器の活用のメリットを再認識することができた。最近の教科書は、カラーの画像やイラスト、図や表などを多く使用し、生徒の興味・関心を高め、理解を深めるように工夫されている。そのため、学習内容は教科書や板書だけでも理解させることができる。さらに生徒の学習の定着を図り、生徒の関心を高めるために、視聴覚教材をどのように組み合わせていくか、効果的な指導法について研鑽を積み、生徒に適した指導を実践したい。そして、電子黒板を活用するための研修にも積極的に取り組もうと思う。

視聴覚教材について想うこと

愛媛県立北条高等学校　教諭　中　川　　寿

近年では、いわゆる「情報化」も進み各学校の視聴覚機器の設備も充実してきた。さらには、高校のみならず小・中学校においてもパソコンやビデオ、プロジェクターなどの視聴覚教材を使用した授業が展開されている。先日、小学３年生の娘の授業参観に行った際には、教室だけでなく、その授業の進め方にも驚いた。教室に大画面の液晶テレビがあり、それを視聴覚機器とつなぎ合わせ、手際よく使用することで授業を進めていた。授業参観ということで騒がしかったクラス内も次第にその内容に引き込まれる様子が手に取るように分かった。決して映像だけに頼らず、ポイントで適切な使用がされていた。しかし、子ども達はそれが当然のことであるような素振りで、驚いていたのは保護者ばかりであった。あまりに子どもの教育に無関心だった自分を恥じていた。しかし、逆に考えてみると、小学校の段階でこれほどの視聴覚教材を使用している授業を体験している生徒達にとっては、中学校や高校での、現在の視聴覚教材や機器で学習効果が本当に上がっているのかという疑問も出てくる。ただ「見せる」授業から、生徒を引きつける「魅せる」授業を展開させていかなければならない。当然これは、使用する教員側の問題であると思うが、もちろん、視聴覚教材が不必要・不効率というわけではなく、新しい形での教材提供を考えてもいい時期ではないかと思う。

私自身も、北条高校で視聴覚教材の担当をしており、教材センターとのやりとりをしているが、実際に教材を使用している教員は特定の方ばかりである。視聴覚教材を使えない、使いたくないではなく、ＤＶＤやＶＨＳビデオテープという教材媒体自体が壁になりつつあるのではないかという懸念がある。５０分の授業で使用するために、使用許可をとり、他校との重複がないかを調べて到着を待つ。この手順を考えて無意識に敬遠をしているのではないかとも考えられる。結局は生徒自体に視聴覚教材が還元されていないのが現状と言える。

ほとんどの高校ではスカイメニューが導入され、校内ネットワークが充実しつつあるが、視聴覚教材に関してはまだまだネットワーク化されていないと言える。最近ではクラウドコンピューティングという言葉を耳にする。このシステムを利用した視聴覚教材の新たな道を描くことができないかと考える。例えば、授業で使う際にクラウド上にデータ化されている教材をストリーミング形式で利用できれば、使用する手順に関しての敷居は低くなるように思える。著作権などの知的財産権の問題はもちろんであるし、教員にＩＤやパスワードを割り当てることも必須になると思う、さらに設備や管理には大きな経費がかかってくると考えられるが、教材の劣化や紛失も防げ、他校との重複借用の兼ね合いも無くなる。何より、必要な教材を必要な時に即利用できるという大きなメリットを得ることができ、最終的にはそれが生徒に知識として定着されることになる。

もしかすると、高校ではタブレットＰＣが必須となり、教科書も電子書籍化され、学校にも生徒用のWi-Fiが完備し、全員がダウンロードして購入するという将来が来るかもしれない。先を見越したシステムの構築や導入を考えておく必要があると思う。

◎　2012年度新任の先生（１名）にご寄稿いただきました。

視聴覚教材について想うこと

愛媛県立松山商業高等学校　教諭　野　澤　武　尊

私が生徒のころ、教室の隅にあるスクリーンが降ろされ、プロジェクターのセッティングを先生が始めると、ワクワクしていたのを覚えている。そのせいなのか、教員となり、プレゼンテーションソフトを使っての授業を作る際、生徒がワクワクする様子をいつも想像している。

私は、講師を３年間させていただき、今年度教員となった。これまでに視聴覚教材を使用しての授業を、私自身が実施しただけでなく、先輩の先生方が実施された授業も多く拝見させていただいた。
今回は、その中でプレゼンテーションについて印象に残っている言葉を紹介させていただき、視聴覚教材についての想いを伝えられたらと思う。

『伝えること。つまりコミュニケーションである。』

これは、今年度６月に本校で実施された、プレゼンテーション研修会の講師で来ていただいた先生の言葉である。「対象者は誰なのか。多角的な視点を持って、その対象者を捉え、広い視野でアウトラインを作っていくことが大事。伝えたいものは対象者が変わろうと変化しない。変化させなければならないのは伝え方である。だからこそ、シート１枚１枚で対象者とのコミュニケーションをしっかりと取らなければならない。」ということであった。この言葉に、プレゼンテーションを作っていく上での私の今までの考え方が一掃させられた。

『忘れてはならないのは、視聴覚教材に頼りすぎないということ。』

これは、講師時代に受けた、先輩の先生による研究授業の批評会での言葉である。「視聴覚教材を使うことで、見栄えも、生徒の反応も良くなる。しかし、それだけで授業を展開してしまってはいけない。板書には、板書の良さがあるし、プリントにはプリントの役割がある。このバランスを大切にしてほしいと思います。」ということであった。時代の先端と昔ながらの王道。このバランスの重要さを改めて教えられた。

『このスライドの技術を自分の財産としてほしい。』

これは初任者研修として、西条高校で授業研修をさせていただいた際の言葉である。上に述べたことを念頭に、また、初任者研修等で教えて頂いた技術を駆使し、時間を掛けて準備をした。その授業でこのような言葉をいただき、大変嬉しく、自信となった。ただ、これに満足することなく、今後も感性、ひらめきを大切にしながら、研究を続けていきたい。

今回は、プレゼンテーションについてのみ書かせていただいたが、どの視聴覚教材においても、「生徒がワクワクする。」、あの感覚を裏切らないような活用をしなければならないと考えている。

―　事務局より　――

1　ビデオテープ・ＤＶＤのコピー（ダビング）は著作権法によって禁止されています。

2　教材の活用方法や留意点さらに生徒の感想や先生方の御意見、御希望をお寄せくださいますようお願いします。

3　教材の運送費は往復とも使用校の負担となります。